

海外移住 資料館だより

Japanese Overseas
Migration Museum News

No. 66

2026 | June

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移民の歴史と、日系コミュニティについて広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階
Tel: 045-663-3257(代)
URL: <https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/index.html>
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 坪井 創

企画展示

日本人移住と共創の原点

～共に挑んだ戦後移住者とJICA～

2026年6月18日(木)～11月1日(日)

ボリビア オキナワ移住地・日系農家のとうもろこし畑

©松井章

日本人移住と共創の原点

～共に挑んだ戦後移住者とJICA～

国際協力機構横浜センター（JICA横浜）の2階にある海外移住資料館。2002年の開館以来、来館者の皆様から何度となく、「どうしてODAの実施機関であるJICAに移民の資料館があるの?」という質問をいただてきました。その答えとして、2024年2月に発行した本誌第61号では、「戦後移住事業がJICAを形作るルーツのひとつ」とであるという視点を紹介しました。

今回の企画展示では、その内容をさらに一歩進め、過去の記録を保存するだけでなく、それらを継承することで「私たちはこれから世界とどう向き合い、どのように共に生きる社会を築くのか」という、未来への問いを提示しています。

かつて日本人移住者たちは、言葉も習俗も異なる未知の環境に身を置き、「どう生きるか」「どう受け入れてもらうか」を懸命に模索し、ときには誤解や摩擦も経験しました。この歴史的な経験は、現代の日本が直面している多文化共生や国際社会における日本の役割を考える上で、重要な示唆を与えてくれます。

戦後移住の開始から70年にわたる、移住者とJICAの歩みを「共創」の記録として紐解き、現在から未来へと続く新たなパートナーシップの姿を描き出します。

「村づくり」の原点 ～送出から定着支援へ～

戦後に再開された日本人の海外移住は、海外からの引揚者等による深刻な人口増加や失業率上昇に対する「国策」としての側面を持っていました。政府主導で大々的に進められた移住政策でしたが、初期の移住者が直面したのは、原生林に人力で立ち向かう途方に暮れるような閉塞や、経験したことのない風土病、厳しい気候など、当初イメージしていた生活とは大きく異なる過酷な現実でした。

そのような状況の下、JICAの前身組織のひとつである海外移住事業団（JEMIS）が行ったのは、単なる「移住者送出事業」ではなく、移住地の生活インフラを整え、どうにかして移住者が現地社会に根付くための「村づくり」に近い取り組みでした。



切り開いた土地に家族の暮らしの基盤となる住居を建てた（アルゼンチン）



斧で大木に立ち向かう移住者（ボリビア）



自らの手で開拓し農地へと変えていく様子（ボリビア）

出典：中南米移住地記録写真集1964

「移住者と共に働く」事業

海外移住事業団職員と移住者との関係はどうだったのでしょうか？時代や移住地によってその関係性は異なりますが、特に移住当初においては、とても緊張感のある関係であったと言われています。開拓生活が続く中、事業団が主導した営農が成功するかどうかは、文字どおり命運を分ける問題だったからです。

ボリビアのオキナワ移住地で事業団職員として移住者と向き合った渡邊英樹さんは、「オキナワ移住地の起死回生策として綿花栽培を奨励した職員の立場は、「もし失敗したら、手足を縛って牛に引かせて、移住地中を引き回してやる」と言われるほど厳しいものだった」と回想しています。それほど、職員も移住者も真剣でした。

移住事業は、外から支援するだけの事業ではなく、移住者と同じ場所に立ち、同じ課題に向き合う、まさに「現場主義・主導」の取り組みでした。移住事業は、人を送り出す事業だけではなく、ともに地域をつくる事業だったのです。



農業の専門家を派遣して移住者の営農支援を行った提供：オキナワボリビア歴史資料館 1959年

オキナワ第三移住地の学校の様子。机は丸木に粗削りの板を釘付けている。提供：オキナワボリビア歴史資料館 1961年

生活の基盤を築いた女性たち



持ち寄り料理を囲んでの祝賀会（パラグアイ・イグアス移住地） 1970年

日本から持ち込んだ食材や調理法が、現地で手に入る限られた食材と出合い、試行錯誤を経て焼きそばや寿司などが日本料理として定着しました。それらは単なる「日本の味の再現」ではなく、現地の風土に合わせた「継承と創造の出合い」として、現地文化の一部となった具体例であるとも言えます。

女性たちの貢献によって移住地は、次世代の子どもたちが安心して未来へ羽ばたくための「故郷」になりました。

展示では、いわゆる「花嫁移住」や、各地で結成された「婦人部」の活動にも光を当てています。

最初は、お互いの生活を支えるために始まった女性たちの小さな互助活動ですが、いつしかそれが、組織的な「婦人部」へと発展。その活動は、移住地で行われるイベントや記念行事などを縁の下で支える、なくてはならないものとなりました。

移住地の日本語学校で働く教師の多くも、移住地の女性達でした（現在でも、中南米の多くの日系日本語学校の教師は、主婦を中心とした女性たちが担っています）。日本語学校は日本の小学校を模して造られ、運動会や子どもの日などのイベントは地域住民を交えて行われました。日本語能力の向上と維持に貢献しただけでなく、日本文化の継承や移住者同士の交流の場としても中心的な役割を担ってきました。



ブラジル農協婦人部連合会の新年会で振舞われた「持ち寄り料理」（サンパウロ） 2026年



ブラジルの婦人部のメンバーたち 2026年

移住地から世界へ広がる「国際協力」の種～現場の知恵が育んだ持続可能な開発モデル～

▼大豆とアグロフォレストリー

パラグアイに持ち込まれた大豆は、日本人移住者が始めた不耕起栽培（耕地を耕さずそのまま種をまく方法）により、同国の主要輸出品へと成長しました。また、ブラジルのトマス移住地で確立された「アグロフォレストリー（森林農業）」は、森林を切り拓く開拓ではなく、木を植え、森を再生しながら食物を育てる手法で、環境破壊を防ぎながら経済的自立を果たすモデルとして、今や世界中から注目されています。



トマス移住地のアグロフォレストリー 2023年



広大な大豆畑の収穫風景（パラグアイ） 2026年

▼地域社会を支える社会基盤

移住者のために設立された学校や病院などは、周辺地域の住民にも開放されるようになり、その地域全体の公衆衛生や教育水準の向上に大きく貢献してきました。移住地の発展が、結果として周辺地域全体の発展にも寄与することとなり、コミュニティ形成のモデルへとつながっていったのです。



ボリビア・オキナワ診療所 2015年

日系社会の公共心が生んだこの仕組みこそが、現在JICAが世界各地で大切にしている「相手国と共に創る」精神の源流です。



ブラジル・サンパウロのリベルダーデ医療診断センター提供：サンパウロ日伯看護協会 2024年

多文化共生社会を創る日系人の経験

一方で、現在日本国内には約30万人の日系人が暮らしています。1990年の入管法改正以降、彼らが日本社会の一員として歩んできたこの30余年の軌跡は、私たちが目指す「多文化共生社会」の先例となりました。

海外移住の歴史は、決して過去の物語ではなく、現代の日本が直面する課題を紐解く鍵となります。

中南米に約310万人を擁する日系社会は、日本をよく理解し、日本に親しみを持つ存在、まさに最も心強い「知日派・親日派」として、日本と各国との信頼関係を支える基盤となってきました。その信頼は、120年以上にわたる移住の歴史の中で築かれてきたものです。移住者やその子孫が、政治・芸術・医療など様々な分野で現地社会の発展に貢献してきたことが、高い評価につながっています。JICAでは現在、日系人の持つ高度な知見やネットワークを活かし、第三国への技術協力（南南協力）や、日本と中南米を結びビジネス展開など、未来へ向けた連携を強化しています。

彼らの経験から学び、どのように共に生きる社会を築くのか。いまだからこそ、日本社会に生きる私たち一人ひとりに問いかけたいテーマです。



浜松ムンド・デ・アレグリア校の日系人の子供たち 2024年
写真提供：学校法人ムンド・デ・アレグリア



らぶらた移住地の盆踊り（アルゼンチン） 2015年
©田島さゆり

現場に刻まれた葛藤と再生 —ドミニカ移住70年

1956年に始まったドミニカ共和国への移住者送出事業は、当時の日本政府の期待とは裏腹に、移住者があまりにも過酷な環境下で、筆舌に尽くしがたい苦難を強いられた苦い歴史でもあります。展示では、2024年に収録されたドミニカ共和国の日系人へのインタビュー映像を上映しています。画面越しに語られるのは、厳しい現実の中にあっても、現地に根を張り、隣人と手を取り合って道

を切り拓いてきた人々の、驚くべき強さと明るさです。

困難を乗り越えて現地社会に根を張った人々の強さと逞しさ、そして明るさ。ドミニカ移住の経験は、「共創」の意味を改めて問い直しています。



インタビュー映像で語られる移住者の言葉

向井猛さん



15歳で移住して、学校には行きませんでした。1キロちょっと離れた小川まで歩いて毎日水を汲むのが私の仕事でした。あとは小さい弟たちの子守をしていましたね。



移住地の青年たちの成人式 前列左から2人目が向井さん



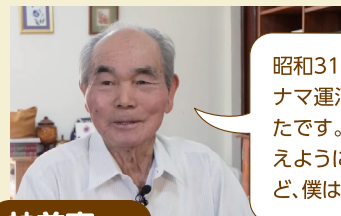
高吉ミサ子さん

最初の入植地では、朝起きると地面に霜が立っていてね。そこに塩がふき出ているのを見て、こんな土地ではいくらがんばってもどうにもならないとわかった。それで、今の場所に移ってきたんです。小さな農地を借りてトマトを作っただけ。それはもう一生懸命に働きましたよ。

日本人というのはどこにいてもひとつの家族。家族はお互いに助け合って前に進み発展していくべきだと思う。その家族としての誇りをもって、他国民にも示していくのが日本人だと思っています。（ここに来て）いい家族ができました。



岩釜徹さん



神前亨さん

昭和31年の12月5日に横浜港を出て、パナマ運河を通して28日間。不安はなかったです。希望と気合がありましたから。考えようによっては苦しかったと思うけれど、僕は苦しいとは感じなかったですね。



中央が神前さん キャベツやピーズ、トマトなどを栽培した



親善ソフトボール大会 前列中央が岩釜さん



ドミニカ日系人
インタビュー2024
映像はこちら！

未来への
メッセージ

移住史から未来を共に創る ～多文化共生社会の先駆者としての移住者～

かつて日本人も新天地を求めて海外へ渡った移住者であった。この歴史的な経験は、我々に謙虚さと勇気を与えてくれます。言葉や制度の違いに戸惑いながらも、地域の一人として受け入れられるために努力し、協働の道を切り拓いてきた。その歩みは、「共に生き、共に創る」ための実践そのものです。移住の歴史に触れることは、いま日本社会が向き合う多様なルーツを持つ人々との共生を考え直す機会となります。

過去を知ることは、他者への想像力を育み、共生力・共創力を高める第一歩です。移住の歴史は、「違いを越えて共に生きる力」を学ぶための生きた教材であり、現代を生きる我々への問いかけでもあるのです。



JICA横浜が実施する日系社会次世代育成研修（大学生招へいプログラム）で来日し、日本文化体験の一環として書道習った日系の若者たち。日本との繋がりを大切にしながら、それぞれの国で活躍している。

企画展示関連イベント

ボリビアと日本の絆

～日本人移住地：サンフアンとオキナワの道のり～

2026年7月5日(日)

14:00-15:30 入場無料 要予約登録

会場：JICA横浜1階 会議室1

講師：松井章さん(風景写真家)



松井章さん

企画展示「日本人移住と共創の原点～共に挑んだ戦後移住者とJICA～」のメインイメージ(表紙写真)を撮影した写真家・松井章さんをお招きし、ボリビアの日本人移住地「サンフアン」と「オキナワ」を中心とした作品を紹介し、撮影を通して見えてきた人びとの暮らしや歴史、現地でのエピソードについてお話しいたします。あわせて、日本で暮らす日系ボリビア人の方々にゲストを迎え、現在の移住地の様子や、日本とボリビアをつなぐ人のつながりについて語っていただきます。



詳細・事前予約は
資料館HPを
チェック!

夏休みイベントのお知らせ

8月に考える「戦争と移民」 短編映画「Hatsu」特別上映会

～ペルー日系社会、知られざる受難の歴史～

●日時 8月29日(土)

①10:00～11:45

②14:00～15:05

参加無料
予約不要

●会場 JICA横浜4階 かもめ

①は監督・プロデューサーの
オンライントークあり



詳細は
資料館HPを
チェック!

第二次世界大戦中、ペルーに住む約1,700名以上の日系人が「敵国人」としてアメリカによって強制的に収容所へ送致された歴史的事実は、日本国内ではまだ十分に認知されていません。この史実に基づくペルー制作の短編映画『Hatsu』(2019年・リタ・イリス・プリエト・マツキ監督)の上映を通じ、戦時下の過酷な状況を生き抜いた南米日本人移民の苦難と力強さをぜひご覧ください。

つば い はじめ

坪井 創 新館長が着任しました!

5月1日に着任いたしました。今年4月にはご来館者数が80万人を超えることができ、ご支援・ご来館いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

海外移住資料館を通じて、約150年の海外移住の歴史、北米や中南米、そして日本の日系社会とのつながりを感じていただければ一助になるよう、務める所存です。どうぞよろしくお願いいたします。



独立行政法人国際協力機構 横浜センター

海外移住資料館

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2丁目3番1号
TEL.045-663-3257 FAX.045-211-1781

<https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/index.html>

Eメール

jicayic_jomm_info@jica.go.jp



資料館来館者80万人達成!

おかげさまで当館は、2002年10月4日の開館以来、累計入館者数が80万人を突破いたしました!これまでご支援・ご来館いただいたみなさまに改めて感謝申し上げます。80万人達成を記念し、4月7日より「祝!来館者80万人」イベントを開催いたしました。館内に設置された二次元コードを読み込み、「入館80万人記念ARフォトフレーム」を起動。館内で撮影した写真画面を受付スタッフに提示してくださった方へ、資料館オリジナルジュートバッグやフリクションペンなどをプレゼントしました。今後も皆様の期待を超える施設を目指してより一層努力してまいります。

引き続き、どうぞよろしくお願いいたします!



入館80万人記念の
ノベルティグッズ

第六回JICA海外移住「論文」および「エッセイ・評論」論文部門授賞式を行いました!

2026年4月17日(金)、当館にて第六回JICA海外移住「論文」部門の授賞式を行いました。大野裕枝館長(当時)より最優秀賞の賞状を受け取った天野剛至さんは、カナダの日系人俳句コミュニティが日系社会で果たした役割について独自の視点で調査され、現地での人との出会いや交流のエピソードとともに、研究の魅力や面白さを存分に語ってくださいました。優秀賞受賞の彌島真帆さんは、戦前のハワイ日系人社会における日本文化の継承のあり方について研究され、今後も移住の歴史を多くの人に知ってもらうために、研究成果や取り組みを広く発信していきたいと力強くお話しされました。受賞作品は当館HPで閲覧可能です。



左より、天野さん、大野館長(当時)、彌島さん
(優秀賞受賞の高木さんはご都合により欠席)

海外移住資料館 周辺マップ



アクセス

みなとみらい線

「みなとみらい」駅(フィニッシュスクエア方面改札)から徒歩約15分

JR線・市営地下鉄

「桜木町」駅から徒歩約15分(汽車道→ワールドポーターズ→サークルワーク)

バス「あかいくつ」号

「ハンマーヘッド」から徒歩約2分

- 開館時間 10:00～18:00(入館は17:30まで)
- 休館日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日)
- 入館料 無料